あとがき

本書は、相愛大学総合研究センター主催の共同研究「日本における諸学問の近代史」の成果の一部をまとめた論文集である。研究会は、二〇一二年度夏から二〇一四年度秋まで、合計一五回行われた。この研究会は、二〇〇六年度から二〇〇八年度まで行われた、相愛大学人文科学研究所主催の共同研究「明治の精神研究会」を引き継ぎ、かつ発展させる目的で開かれた。すなわち、「明治の精神研究会」では学内外の様々な分野の研究者に参加頂き、異分野の知見を取り入れることで研究の活性化を図り、また公開講座と研究成果の公刊を通じて地域と社会へ貢献することを目的としたが（「明治の精神研究会」の成果については、鈴木徳男・嘉戸一将編『明治国家の精神史的研究――〈明治の精神〉をめぐって』（以文社、二〇〇八年）を参照されたい）、「日本における諸学問の近代史研究会」では、より広範な分野の研究者に参加頂き、またテーマを日本近代における諸学問の展開とすることで、大学が近代化という社会の大変革のなかで占めてきた位置を探り、より深く知と社会の関係性について問うことができたものと考えている。

研究会での報告のうち、本書には、法、文学、言語、宗教、家政、食、景観、音楽、儀礼の観点から近代化を考察した論文が収録されている。蛇足ではあるが、ここで近代化の観点からそれぞれの問題を整理しておこう。

日本の近代化にあたって法が西洋から受容されたのは周知の通りだが、法が外的な規制にとどまらず、個と社会に人間的生のあり方を呈示する知であるとするならば、西洋法の受容としての近代化とは、他なる人間的生を個と社会のレヴェルで血肉化する苦闘に他ならない。この血肉化の苦闘は、一見するとパラドクシカルだが、自己なるものの再形成を目指すためにアイデンティティの問いを賦活する。それが民族的起源への遡行を要請し、「国文学」なる観念に結実する。しかし、近代という時代が強く意識されるならば、とりわけ小説という西洋的な文学のあり方が強く意識されるならば、文学は歴史的連続性の下のみに観念されることなく、漢文学など他なるものを如何に消化してきたのかという問いへと赴く。この他者との出会いによる自己の再発見という経験としての近代化は、再発見のための方法論的深化を要請するのであり、近代化が単なる西洋化とは異なるように、もはや文学研究は西洋の文献学的方法の模倣にはとどまらないだろう。こうした文学をめぐる問題が通時的なものだとすると、通時的なものとともに共時的な問題を惹起するのが言語である。とりわけ方言が射程に入れられるならば、言語は日本か西洋か、現代的に言えば「国語」か「国際語」としての英語かという二元論には収まらず、時代の要請するアイデンティティに応じて言語が序列化・階層化されるという複雑な様相を帯びることになる。

近代化の複雑な様相は、人間的生のあらゆる分野に及ぶ。宗教における特定のテクストの「聖典化」は古典的な現象ではあるが、それに公開性が要件とされるのは、少なくとも日本においては近代的な現象だと言って良いだろう。とはいえ、この精神生活に関する現

象を前近代からの潜在的な連続性によって把握すべきなのか、あるいはあくまでも西洋的な生の様態に触発された近代的変容として理解すべきなのか。また、西洋的な生活様式の受容は、日本においては家政の学問化をもたらす。しかし、生活様式が文字通り生きられるものであって、学ばれるものではないとするならば、この学問化は特殊な現象であって、敢えて言えば、近代化を急いだきわめて日本的な現象だと言えよう。しかも、この特殊な学問が女性に割り当てられることで、日本近代において女性的な生を規定することになったのである。さらに、生活様式の学問化という日本的展開は、意図せざる産物をもたらす。すなわち、「富国強兵」のための体位向上という観点から、西洋食が奨励されるとともに栄養に関する知の学問化が行われたが、この日本的展開はビタミンの発見という世界的成果をもたらすのである。

近代化の日本的現象は、とりわけ生活の美的・儀礼的領域において顕著に現れる。近代化が西洋化として表層的に理解された明治期の都市計画は、西洋的な景観の構築を目指すが、計画が実現されるや否や、つまり生活の場となるや否や変容する。計画から離反していくこの日本的変容、言い換えれば無秩序化としてしばしば指摘される現象に、西洋的な公共性の観念の欠如を見出すのは容易だが、日本において近代的な美とは何であるのか問い直すよう迫られる。美の観念が、より一層置き去りにされてきたのが音楽だろう。近代化の一環で西洋の音楽理論が受容されるものの、理論の模倣だけが長らく行われ、学的知としての展開が遅れる。しかも学的知として美学的・史学的研究が始まるや否や、音楽の技術的環境変化に伴い、その関心を技術的条件へと移すことになる。技術という美にとって外在的な条件と言えるものを関心の中心としてきたのは、日本近代の特徴と言って良いのかもしれない。雅楽という美と儀礼の担い手は、近代においてその技術的な能力から西洋音楽受容の受け皿となったが、明治維新後の政治的要請から変容を強いられる。仏教的な要素が排除され、また家単位で継承されてきた伝統は政府による統制下に置かれ、伝統的な儀礼は近代的な政治のための儀礼へと変容するのである。そこで重要なのは、信仰に根差した美ではなく、政治的な技術となる。

これ以上の贅言は愚見となるだけだろう。最後に、参考までに全一五回の研究会報告者（肩書は報告当時）とタイトルを記しておく（ちなみに各回の概要は、『相愛大学研究論集』第二九号（二〇一三年）、第三〇号（二〇一四年）、第三一号（二〇一五年）に掲載されている）。

第一回　二〇一二年七月二五日（水）
報告者：嘉戸一将（相愛大学人文学部准教授）
タイトル：「形なき形」を把握するということ——法的諸概念の受容と変容

第二回　二〇一二年九月二六日（水）
報告者：鳥井正晴（相愛大学人文学部教授）
タイトル：漱石の作品を読む（「倫敦塔」から「明暗」まで）——研究という名の汽車に乗って

第三回　二〇一二年一〇月二四日（水）

報告者：小野正嗣（明治学院大学文学部専任講師）
タイトル：日本におけるフランス文学研究の始まり

第四回　二〇一二年一一月二一日（水）
報告者：川中美津子（相愛大学人間発達学部教授）
タイトル：日本における服飾美学研究の始まり

第五回　二〇一二年一二月二〇日（木）
報告者：中村圭爾（相愛大学人文学部教授）
タイトル：東洋史学の近代

第六回　二〇一三年五月二二日（水）
報告者：片岡尹（相愛大学人文学部教授）
タイトル：金・近代・国際通貨

第七回　二〇一三年六月一九日（水）
報告者：鈴木徳男（相愛大学人文学部教授）
タイトル：ある国文学者の肖像――田中重太郎論

第八回　二〇一三年九月二五日（水）
報告者：小野真（相愛大学人文学部准教授）
タイトル：近代化による雅楽界の変容

第九回　二〇一三年一一月二〇日（水）
報告者：黒坂俊昭（相愛大学音楽学部教授）
タイトル：近代日本における「音楽」概念の変遷

第一〇回　二〇一三年一二月二日（月）
報告者：永藤清子（甲子園短期大学教授）
タイトル：家政と家政学――明治期の文献整理から

第一一回　二〇一四年五月二〇日（火）
報告者：千葉真也（相愛大学共通教育センター教授）
タイトル：国文学史の誕生

第一二回　二〇一四年六月一七日（火）
報告者：佐々木隆晃（相愛大学人文学部准教授）
タイトル：浄土真宗における聖典の歴史と意義

第一三回　二〇一四年九月一六日（火）
報告者：長谷川精一（相愛大学共通教育センター教授）
タイトル：言語教育の比較史的視角から見た〈沖縄方言（地域言語）、日本語（国語）、英語（国際語）〉

第一四回　二〇一四年一〇月二一日（火）
報告者：太田美穂（相愛大学人間発達学部教授）
タイトル：食の近代化と栄養学

第一五回　二〇一四年一一月一八日（火）
報告者：新屋千樹（都市再生機構事業戦略室特定戦略チームリーダー）
タイトル：近代日本における都市計画の歩み

研究会に御協力頂いた皆さん、とりわけ学外より御参加頂いた方々に、この場を借りて御礼を申し上げたい。

二〇一五年一二月二一日

龍谷大学文学部准教授　嘉戸一将